

森鷗外・賀古鶴所往復書簡に見る「スペイン風邪」

——パンデミックの現場から——

酒 井 敏

はじめに

このパンデミックの終息をいつと見るかは地域によって差があるが、速水融は「当時の世界の人口は二〇億ならず」だったのに対し「全体で二〇〇万から四五〇〇万」がスペインシュ・インフルエンザによって亡くなったと言⁽³⁾。新型コロナウイルス感染症による死者数は、一昨年一二月三〇日午後五時現在、六六八万七二六五人とされている⁽⁴⁾。現在では世界の人口が四倍以上になっていることを思うと、その惨禍がいかに大きかったかが理解できよう。言うまでもなく、日本も同様の惨状を呈した。

内務省衛生局編『流行性感冒』⁽⁵⁾は流行を三回に分け、以下のように整理している（104頁。本稿のルールに従って表記を改めた）。

第一回流行 大正七（一九一八）年八月～八年七月 患者数二一六万八三九八 死者数二五万七三六三
死亡率一、二二%

第二回流行 同八年一〇月〜九年七月 患者数二四二万二〇九七 死者数一二万七六六六 死亡率五、二九%

第三回流行 同九年八月〜一〇年七月 患者数三二万四一七八 死者数三六九八 死亡率一、六五%

計 患者数三三八〇万四六七三 死者数三八万八七二七 死亡率一、六三%

『朝日新聞』に掲載された最後の「感染者表」に拠れば、令和五（二〇二三）年五月八日午前〇時現在、国内で確認された新型コロナウイルス感染者数は三三八二万七八〇〇、死者数七万四六九〇（死亡率〇、二二%）。当時の日本内地の人口が、現在の半分以上、およそ五五〇〇万人だったことを考えれば、「スペイン風邪」がどれほど人々を脅かしたか改めて実感されよう。

その様相を透かし見せるように工夫しつつNHKでドラマ化された志賀直哉の「流行感冒」⁷などが好例であるが、当時の文学者たちは、このパンデミックが惹き起した物語を作品に描き、状況にコメントし、その様相を日記や書簡に書き残した⁸。それらは、同じような経験をした先人の記録として貴重な歴史の証言であり、ここ四年間ほどの私たちの日常が自ずから思い合わせられる。

東京大学医学部の同期生だった森鷗外と賀古鶴所も、大正九（一九二〇）年の初め、そろって「第二回流行」の渦中にあつたスパニッシュ・インフルエンザに罹患した。ちょうどその頃、大正八年二月二十四日付鷗外書簡⁹から翌年二月二十八日付賀古書簡¹⁰まで、二人がやり取りした書簡が、往復書簡として読めるほど整った状態で今日まで遺されている。本稿では、そこに繰り返し登場するインフルエンザに関わる記述に焦点を当て、親しい友人同士であり医師でもあつた二人のインフルエンザ体験をたどり、その意味やそこに浮上する課題を考察してみた。文学作品とは位相の違う臨臨床的・具体的な現場の記録としてだけでなく、私達が置かれてきたコロナ禍の状

況と改めて向き合う契機ともなれば幸いである。

一、鷗外・賀古往復書簡

具体的な叙述をたどる前に、それぞれ底本の書簡番号に日付と簡単な注記を添えて、往復書簡としてのあり様を整理しておく。インフルエンザに関わる言及のある書簡には○印を付した。

鷗外 一三四四（大正八年二月二十四日）

賀古 七五（同二月二十四日・一三四四の返信）

七六（同二月二十七日 翌二十八日の「委蛇録」に関連記事）

一三四八（同二月三十一日）

一三五二（大正九年一月二日）

一三五四（同一月五日）

一三五五（同一月六日）

七七（同一月八日・一三五五の返信）

一三五六（同一月一日）

七八（同一月一日・一三五六、一三五七の返信）

一三五七（同一月一日）

〇七九（同一月四日・一三五九の往信）

一三五九（同二月十五日）

〇八〇（同二月十五日）

〇八一（同二月十五日）

〇一三六一（同二月二十四日）

〇八二（同二月二十五日・一三六一の返信）

〇一三六三（同二月一日 消印九日）

〇八三（同二月一日・一三六三の返信）

〇一三六四（同二月一日）

〇八四（同二月三日・一三六四の返信）

一三六五（同二月一日）

一三六六（同二月一日）

〇八五（同二月一日・一三六五、一三六六の返信）

一三六〇（同二月一日 正しくは「二月」。現行『鷗外全集』の誤り）

〇八六（同二月一日・一三六〇の返信）

八七（同二月一日「推定」）

〇一三六七（同二月一日）

〇八八（同二月一日・一三六七の返信）

一三六八（同二月一日）

一三七〇（同二月二日）

一三七一（月日不明 一三七〇の修正と推定）

〇八九（同二月二五日・一三七一の返信）

九〇（同二月二八日）

以上の通りである。大正八年末から始まっているように、これらの書簡は、そもそも互いのインフルエンザを主題とする書簡ではない。起点となる一三四四の本文を引用してみよう。

拝呈御火難定テ御不快ニ可有之奉存候翌朝小川町参見候風ナキタメニモ可有之候へ共ヨク消シ留候ト存候〇御話申上候社会政策猶細密ニ申上度近日又々参上仕度存居名ヲツクレバ「国体ニ順応シタル集産主義」

Collectivusmus トリ即チ共產主義
集産主義ノ意ナリ

トデモ謂フベキカ又「国家社会主義」

國家ガ生産ノ調
節ヲルユエニ

ト云フモノニ近ケレド世間ニ唱へ居ル八同盟

罷工ヤ群衆ノ示威運動ニテ成功セントスルモノユエ全ク別ニ有之候猶研究中ニ御坐候

鷗外に關心を持つ者なら「あ、あれか。」と思い当たる、敗戦から程なく唐木順三が「御話申上候社会政策」

以下を引用、さらに一三五二―一三五六、一三五九、一三六四、一三七〇の記述を引用して考察を加え、「鷗外は秘密裡に社会革命を目論んで」おり、「山縣公を中心とする勢力によつてそれを遂行せんとした。」と提起した有名な書簡である。⁽¹²⁾ 本稿ではこれ以上立ち入らないが、今日までこの時期の鷗外書簡が話題にされる際には、常磐会⁽¹³⁾の政治性をめぐる議論を含め、「国体ニ順応シタル集産主義」という「社会政策」を中心とする言説に専ら⁽¹⁴⁾ 関心が向けられてきたと言えよう。

しかし、ほとんどの場合、検討の対象とされたのは鷗外書簡であつて、往復書簡として読む試みはなされていない。例えば、唐木が引用しなかった一三四四の冒頭部にしても、返信である七五と合わせて読むことによって、

興味深い話題を紡ぎ出す契機となる。¹⁵ 続く七六も、「かつら廿五日に三男を産み申候御命名下され度候」とあるように、賀古の姪・かつらと額田晋夫妻の三男への命名依頼であり、鷗外は依頼に応えて「楸」と名付けた。¹⁶

一方、二人の身辺から社会状況に目を向けてみれば、民衆の存在がクローズアップされた「大正デモクラシー」の風潮を背景に、前年には米騒動やシベリア出兵、一月の第一次世界大戦休戦からこの年一月にはパリ講和会議開催、四月の国際連盟規約採択を経て、六月にヴェルサイユ条約が調印され、翌大正九年一月に国際連盟が発足した。同じ月、国内では普選期成連合会が結成され、森戸事件が起こる。当然ながら、往復書簡ではインフルエンザだけが話題にされているわけではなく、前述のような身辺の出来事を点綴しつつ、社会主義や労働問題を含めて、こうした社会状況が論じられてゆく。

専ら「社会政策」に注目が集まったのも故なしとしないのだが、実は両者のインフルエンザ体験をたどる中で、その議論に欠かせない素地となる問題が見えてくる。本稿がインフルエンザに焦点を絞った所以であり、言わば本稿は避けて通れない基礎作りなのだ。そう確認した上で、この時点までの鷗外の言説はもとより、先行研究を始めとする関連の文献を参照して晩年の鷗外が構想した「社会政策」を検討する営みは別稿に譲り、まず賀古のインフルエンザ体験をたどるところから始めよう。

二、賀古鶴所のインフルエンザ体験

賀古書簡に最初に現われる関連の記述は、七九（二月二四日付）本文末尾の「今晚八せきも減し喉痛も軽くなり候」である。鷗外が賀古の罹患を知っているのを前提にした書き方だが、八三（二月一〇日付）に

小生も去月十一日夜より一昨日迄臥褥、昨日は坐褥、今日初めて小川町へまあり二、三時間見物いたし帰り候今に嘔声がいえず候但し喰ふ事ハ先づ一人前は確に候

と記しているように、インフルエンザを発症したのは一月十一日の夜¹⁷だったようだ。ただし、同日付の七八には、それらしい記述がない。おそらく、自覚症状が出る以前に七八を書き終え、七八と七九の間に現在では失われている書簡があつたのだろう。

発症後、賀古の症状は主に咳や喉の痛み、そして発熱だったようだ。先に引いた七九に加えて、八〇（一月一五日付）に「咽をいたため一昨夜来静臥、今朝は快くなり申候」、八一（同前）に「風邪今日は平熱に復し候へども喉がイラ／＼痛み候てコヅキ候いつもとは様子が變つて覚え候へとも兎も角ももはや平熱に候」とある。「いつもとは様子が變つて覚え候」と書いてはいるが、一方で「風邪」と記してもいるので、未だインフルエンザとの認識はなく、軽く考えていたのかも知れない。

インフルエンザと書かれるようになるのは、鷗外が自身の「流行性感冒」罹患を伝えた一三六一（一月二四日付）に返信した八二（一月二五日付）から。次章での叙述に便宜でもあるので、少し長いが冒頭の一節を引用しておく。

インフルエンザ^(インフルエンス)御静養大切に候西郷¹⁸の話に肺炎の症が未だ明朗ナラサル二寸とした動作にて心痺を起すものあり一医之如きは熱さめ輕快を覺ゆとて顔を洗ひ洗面所より床にかへりてア、よい氣持ちだといふてゐる間にポツクリまゐつてしもふたのがある云々ドウゾ当分静養をなされ度希候○大口氏方にて八妻君を始め六人ねこみ大人の三健康娘子ハ危険に陥りてより今日にて既に七日二なる毎日数回食塩水注射と申す事に候まり子多少輕快なるや被案候小生昨日は平熱になりて三日め故午前二時間許床上に座して書きものを致候処晩

に八一度三分許熱が上がりけふは音^{（マ）}なく伏せりあり候西郷も一ヶ月許就褥せし由に候知人中にても家内中ねてゐるものが随分^{（マ）}にあり申し候

一月一五日に「もはや平熱」と書きながら、ここでも「昨日は平熱になりて三日め故二時間許床上に座して書きものを（傍線・酒井）したと書いている。おそらく、平熱に下がったと油断してぶり返した前回に懲りて、慎重にふるまつたつもりだったのだらう。しかし、結果は「一度三分許熱があが」つてしまい、またもやり返して「けふは音なく伏せりあり候」という体たらく。今までの「風邪」で経験したのとは全く違う未曾有の執拗さに、「インフルエンサ」の手こわさを実感したに違いない。鷗外の常盤会欠席を受けて、「西郷の話」を例に「静養」を促しているのも頷ける。

開業医としてスペイン風邪の治療に当たった五味淵伊次郎も「大正七八年ノ世界的流行性感冒ノ見聞録^①」で「早期ノ起床ニヨリ容易ニ重悪ニ変化」（447頁）「起床或ハ冒感ニヨリ一般症ヲモ増悪シ易」（452頁）いなど、床離れを急ぐ危険性を強調していた。「西郷の話」の「一医」もそうだが、今回の新型コロナウイルス同様、スパニッシュ・インフルエンザも、予後が悪いだけでなく思わぬ余病を併発・続発させるケースが多かったようだ。この問題には、鷗外のインフルエンザ体験を述べる際に、もう一度触れる。

さて、一月二四日に再び振り返した賀古の病状は、先に八三で見たように、一週間ほど経つと「小川町へまゐり二、三時間見物」しても「今に嘔声がいえず」で済む程度にまで回復した。しかし、三日後の八四に

小生八朝ハノルマル午後二ナルト声が枯レ、咳嗽が折々つくトラヘイチス（＝「Tracheitis」独ノ気管炎・酒井注）が未ダ全治せぬ位の事に候然しタバコがのみたいトいふ意が折々きざし候程故モウ大丈夫と被存候とあり、続く八五（二月一七日付）で

けふも一寸と小川町へまゐり候て、三時間働らき候二熱が五分許上り候先づ当分シャボターゼの事とあきらめ罷在候、種々不快の事の続き、一つは病氣の爲めにもある可き歟小腹が立つてならず婢等サゾ大迷惑ナル可くと思ひやられ候

と、「二、三時間働ら」ただけで「熱が五分許上」るじれつたさを訴えているように、時間の経過に従つて順調に快方に向かつてゐるわけではない。口では「シャボターゼの事とあきらめ罷在候」と専ら安静・静養を言いながら、「婢等」に八つ当たりしている。長引く「インフルエンサ」こそ、「種々不快の事」の最たるものだったに違いない。とは言え、ほぼこの辺りで、賀古は自身のインフルエンザに一区切りつけたようだ。

二日後の八六では、「病舎建築場ナゾニ立ち入り世話を焼」いたため「一寸と風邪にかゝり」「昨日来横臥」と再び寝込んだことを報告しながら、「尚一兩日臥褥せば全快すべくと被存候」と樂觀的に記している。賀古は、もはや「インフルエンサ」ではなく普通の「風邪」だと自己診断しているのである。焼失した病院の再建を見回るなど、無理な外出をしてはぶり返し、懲りずにまたぶり返し、を繰り返しているようにも思えるが、これ以降、賀古の書簡に彼自身の症状が記されることはない。

一月一日から二月一〇日まで、ざつと四週間病褥で過ごすことを強いられた勘定だが、安政三（一八五六）年二月二日（諸説あり）生まれの賀古は、この大正九年で満六四歳。当時なら間違ひなく「高齢者」であり、典型的なインフルエンザの症状を呈しながら無理を重ねたにも関わらず、肺炎にならずに済んだだけ幸いだったとも言えよう。クロスビーも速水も『流行性感冒』も、主症状の一つとして呼吸器系の炎症を挙げ、さらに気管支炎や肺炎を併発・続発する症例の多さに言及しているが、まだ抗生物質が発見される前で、特效薬はなかった。八四で「タバコがのみたいトいふ意が折々きざ」すのを回復の証拠のように記しているから、賀古は喫煙者だっ

たのだろう。新型コロナウイルスの流行初期には、喫煙の習慣のあった者や喫煙者が多く重篤な肺炎を発症して死に至った。それを想起すると、賀古の僥倖が改めて確認される。

自身のインフルエンザに関わる最後の記述は、八九（二月二五日付）の「天気快晴候まゝ愈明日鶴荘へ保養にまゐり先づ十日許専ら散歩にくらす可く相定め申候」。ようやくここで、賀古のスパニッシュ・インフルエンザに決着が着いた。東京を離れ、千葉県日在の別荘で「保養」、「先づ十日許専ら散歩にくらす」と静養（＝諸々の俗事からの「シャボターゼ」）に努めることに決めたのである。しつこく長引く不快な症状に悩まされはしたが、余病を併発・続発することなく回復して日常に帰還した。それが賀古のインフルエンザ体験だったと言えよう。

三、大口鯛二のインフルエンザ体験 常磐会とインフルエンザ

前章で引用した八四（二月二三日付）の一節に続けて、賀古は

池辺の手紙ニ在京都の妹流感デ没ス次テ自分が感染セシガもはや輕快トイふ常磐会も此度の風邪に八随分たゝられ申候

と記している。「池辺」は池辺義象²⁰。大正四年一二月に鎌田正夫、六年一月に須川信行が亡くなった後を承けて常磐会の選者の一人となっていた。文久元年生まれであるから、この大正九年には満で五九歳になる。「妹」も中年以上ではあったろうが、逆縁には違いなく、心痛は深かったに違いない。

そう思い及ぶと、同じく前章で引いた八二で「危険に陥りてより今日にて既に七日二なる」と書かれていた「大口氏」、すなわち常磐会の選者の一人大口鯛二²¹の「娘子」の病状が改めて危惧される。

「毎日数回」受けていたという「食塩水注射」は『流行性感冒』に「食塩水又は「リンゲル」氏液の静脈内注射は推奨すべき方法なり、心衰弱のある時は勿論なれども、之なき時にも用ふべし、甚だ有効なることあり」（第六章／第四節 流行性感冒の治療／第二項 対症療法」。360頁）などであるので、一定の効果が認められる治療法として広く行われたようだ。ただし、続けて「毒素を洗うが如き効あるものならんか」（同）とも書かれるように、有効性が科学的に証明されていたわけではない。高熱から脱水症状に陥るのを予防する効果はあったろうが、現在のタミフルのようなインフルエンザ治療薬が存在しない当時、経験則に基づいて試行錯誤を繰り返す中で見出された対症療法の一つだったのであろう。

果して、「娘子」は悲しい結末を迎えることとなった。ほぼ二週間後の八三で常磐会の日程調整について記している中に

大口氏第三日曜たる十五日には亡嬢の骨を抱きて帰へく、第四日曜なればと同人より申越し候に付きソレコレ問ひ合せ傍内幸町（井上通泰を指す・酒井注）へ先づ御希望通り二行つてけつこうと申やり置き候同会は廿二日、第四日曜二延ばし候

とある。「亡嬢の骨を抱きて帰」とは、お骨を菩提寺に納めるため鯛二の故郷・尾張名古屋に帰省する意であろう。何日だったのか正確には分からないが、八二からほどなく亡くなってしまったわけだ。ちなみに、「御歌所寄人大口鯛二墓」の碑銘を持つ墓が清須市西枇杷島町に現存する。

最年長の鯛二（「大人」）の「健康」で家族「六人ねこ」んでいるという状況は、専ら若年層に感染が拡大したオミクロン株流行初期の様相を思わせよう。クロスビーは「サンフランシスコでは1918年から翌年1月末までのあいだに」「3500人が亡くな」り、「死亡した人たちのほぼ3分の2は20代から40代の人たち」だっ

たと記し（前注（1）同書149頁）、他の都市の例も挙げて、若い世代が重篤な症状を呈するのがスパニッシュ・インフルエンザの一つの特徴だと指摘している。鷗外が二三六で「既二経過シ」たと書いていた茉莉について、改めて「まり子（＝茉莉・酒井注）多少軽快なるや被案候」と記しているのもそうした連想からであろう。鯛二の娘は治療届かず亡くなったが、幸い茉莉はそのまま順調に快復した。しかし、唯一人感染を免れたように見える鯛二本人も、この年一〇月に五六歳で亡くなっている。予期せぬ病で家族や近親者を突然に失う心痛の大きさが改めて痛感されよう。しかも鯛二の場合、懸命な治療も空しく愛娘を失う逆縁だったのだから、その傷は一層深かったに違いない。

スパニッシュ・インフルエンザのパンデミックは、原因も治療法も分からない状況で多くの別離を強いた。原因こそ特定されていても、大勢の人が親しい人との突然の別れを強いられた点では、今般の新型コロナウイルスのパンデミックも同様である。特に初期段階において、そうしたエピソードが多く流通したのは記憶に新しい。未だ処方が定まっていないのだから、死者が出てしまうのは避けられないとしても、せめて納得して送れるだけの死の迎え方ができなければ、遺される者は悲しみに加えて消えぬ悔恨まで背負い続けなければならない。死にゆく者の苦痛や未練、心残りは言うまでもないが、生き延びた者や遺された者も、身体的な後遺症だけでなく、心の傷にも悩まされ続けるのである。

流行を収束に向かわせる合理的で効果的な対策が求められるのは当然であるが、そうした心の傷に寄り添う姿勢を忘れてはなるまい。目前の危機が大きければ大きいほど、そのような心の傷を自分事として感じられる共感力が、社会にも個人にも求められるのである。

四、森鷗外のインフルエンザ体験

さて、鷗外のインフルエンザ体験を見てゆこう。以下に引用する一三六一（一月二十四日付）の伝えるところによれば、鷗外も賀古に十日程遅れて「流行性感冒」（「スパンニッシュ・インフルエンザ」）で「引籠」らざるを得なくなった。

人サワガセノ流行性感冒第一二妻ヲ襲ヒ次ニ小生ヲ脅シ候軽症ナレドモ腰部諸筋ガ痛ミ物ニツカマリテヤツト立ツヤウナ体裁ニテ流石ノ瘦我慢ノ小生モ今日ニテ三日間引籠候尤モ出テハ属官共ニウツス虞モアレバ休ンデ居ル方四方八方ノ好都合ニ可有之候明日ハ常盤会ナレドモ此塩梅デハダメト奉存候否奴類ドウシタ「ヤラ感染セズピン／＼イタシ居候ナンダカ家ガオ伽嘶ノヤウナ状況ニ相成居候ソノウチ小児等モ僵レルカト思候ヘドモサシアタリ為シ得ル限ノ隔離ヲナシアリ只今マデハ相済候山田デハ茉莉ガ既ニ経過シツキソヒノ老女肺炎ニテ入院シ珠樹ハ茉莉ヲ看護シタルニ今マデ無事ニ候社会問題ハ其後モ大ニ研究イタシ居候

「第二妻ヲ襲ヒ」は、「委蛇録」を参照すると「妻病」とある一四日。二日おいて、一七日に「味爽。問茉莉病于山田氏。参寮。」の記載がある。当時の鷗外は帝室博物館総長兼図書館頭の職にあり、月・水・金は博物館、火・木・土は図書寮と、一日おきに交互に出勤していた。平常通りの勤務を続けながら、図書寮に出勤する前の早朝、山田家に立ち寄って茉莉を見舞ったわけだ。二四日に「既ニ経過シ」と書かれるのだから、茉莉の発症は志げと同じ頃か、むしろ早かったのではあるまいか。いずれにせよ、インフルエンザに包囲された濃厚接触者である鷗外の罹患・発症は避けられなかったろう。

日曜日の一八日を「瞻妻病。」と妻・志げの看病に充て、以後二二日まで「参館。」「参寮。」「参館。」と平常通り出勤しているが、二二日から二五日までは「病在家。」の記載となる。二四日は、まさに「引籠」って「三日」目であつた。鷗外まで寝込んでしまい、観潮楼に暮らす家族の中で「杏奴類」の幼い二人だけが「感染セズピンく」している様子を「家ガ才伽嘶ノヤウナ状況ニ相成居候」とユーモラスに表現したのである²²⁾。快方に向かつては、自覚があつたからか、まだ余裕があるように見える。

二五日の常磐会は欠席しなければならなかったものの、「軽症ナレドモ腰部諸筋ガ痛ミ」とあるだけで、咽喉痛や発熱には言及していない。「痛ミ」は「物ニツカマリテヤツト立ツ」ほど酷かつたようだが、二六日から再び以前と同じリズムに戻る。二五日は日曜日だから、実質的な欠勤は三日間だけ。これで済めば、賀古と比べるまでもなく、確かに「軽症」と言えよう。しかし、そうはゆかなかつた。

先に指摘しておいたように八二（一月二五日付）は、この一三六一の返信であり、「インフルエンサ御静養大切に候」「ドウゾ当分静養をなされ度希候」など、ストレートに鷗外の病状を氣遣つた文言が目を惹く。しかし、その書簡の返信である一三六三は二月一〇日付（消印九日）。鷗外は直ぐに返信できず、二週間以上間が空いてしまっているのだ。

この間の事情を「委蛇録」から窺つと、二月二日に「参館。：（中略）：驗病之侵左腎。服牛渾（＝乳・酒井注）。」と記されて以後、一週間ほど「病在家。」が続き、²³⁾「参館。」「参寮。」「参館。」のリズムに戻るのは一六日月曜日から。当時の郵便事情に鑑みて、鷗外はどんなに遅くとも二月二七日には八二を受け取っていたはずである。先に見たように一月二六日から、一旦平常のリズムに戻っていた。にも関わらず、返信がこのタイミングになったのは、そもそも無理を押しでの出勤で、本復してはいなかったことを示しているのではあるまいか。先に見たよう

に、賀古は何度もぶり返し、インフルエンザの無類のしつこさに悩まされた。そんな賀古の氣遣いも空しく、鷗外も同じ轍を踏んでしまったわけである。「委蛇録」の簡潔な漢文の記述は、より多くの身体的な違和や苦痛を背後に隠しているのだろう。

一三六三の以下の記述が、病状を具体的に伝えている。

拝啓御無沙汰仕候インフルエンザノ後急性腎臓炎続発シ牛乳療法ニテ大ニ回復仕候シカシマダ引籠居候……(中略)……○其後社会問題ヤラ普通選挙ヤラ色々大イニ研究イタシ候シカシ時候ト身体ト共ニ少シヨクナル迄往来ハセヌガ宜シト存候○昨夕小金井来リ「用心シロ土台ニ萎縮腎ガアルドラウ」トオドカシ候勿論老人病ノ氣味ハ免レズ候小金井一家、於菟一家皆無事ニ候

「インフルエンザノ後急性腎臓炎続発」、鷗外のインフルエンザは余病として腎臓炎を誘発したわけだ。それを知った賀古は、先にも一部を引用した八三の冒頭で以下のように返信している。やはり鷗外に対する深い氣遣いが窺われよう。

拝啓 インフルエンザ^(マ)後ノ急性腎炎云々驚き入り候然し急性のは扁桃腺炎後なぞ二往々生じ候を数多く経験いたし候牛乳をのミて静臥しあれば恐るゝに足らず候セイテ外出したりして脳に水氣を持ち一時(数ヶ月間)氣の狂ひたるものを二人見候萎縮腎ハ真平御免にこれあり候へは大概喘息を発し候

賀古は「驚き入り候」と書いているが、『流行性感冒』「第六章ノ第三節ノ第四項ノ五、泌尿生殖器系統」では、「熱性蛋白尿は屢々見らるる所なるに反し真性腎臓炎は少なしとせらる」(351頁)としつつも「真性腎臓炎は一般が考ふるよりは遙に多しと云ふ」(同)との見解が記されている。腎臓炎を「続発」させる症例は一定の注目を集めていたようだ。⁽²⁴⁾一方で「急性のは扁桃腺炎後なぞ二往々生じ候を数多く経験いたし候」と書いているように、

インフルエンザと同じように高い熱が出る扁桃腺炎が急性腎炎を続発させることは早くから知られていた。⁽²⁵⁾ その意味では、直接の因果関係が明らかでなくとも、インフルエンザの予後に同様の事態が起きてても不思議ではない。耳鼻咽喉科の専門医である賀古に「恐るゝに足らず」と言われれば、義弟（妹・喜美子の夫）小金井良精⁽²⁶⁾に「用心シロ土台ニ萎縮腎ガアルドラウ」トオドカ」された鷗外の不安も少しは和らいだらう。賀古の気遣いが窺われる。

二年後の大正一一年七月九日、鷗外は萎縮腎と老人性の肺結核で亡くなる。鷗外の父・静男の死因も萎縮腎であり、腎臓移植や人口透析のなかった当時、治療法のない不治の病だった。⁽²⁷⁾ 賀古が「真平御免」と記す所以である。鷗外はこの年五八歳で、賀古より六歳若い。しかし、感染によってより大きなダメージを受けたのは年長の賀古ではなく、腎臓炎を「続発」させた鷗外だったと言えよう。

その腎臓炎について、鷗外は「牛乳療法ニテ大ニ回復」したと書き、賀古も「牛乳をのミテ静臥しあれバ恐るゝに足らず」と記している。今日の目からは奇妙に映るが、「委蛇録」の記述から見ても、ごく自然に選ばれた治療法だったようだ。以下、鷗外のインフルエンザ体験において腎臓炎と牛乳療法が持つ意味を考えてゆこう。

五、牛乳療法をめぐって

鷗外は、一三六四（二月一三日付）を「もうすつかり健康だと自信してゐる。」と書き起こす。一方、賀古の同日付の返信（八四）には次のような一節がある。

○昨晚額田晋がまゐり候故インフルエンサ後ノ腎炎経過ヲ尋ね候処、やはり牛乳、静養、成るべく氣長にやる方善しいゆる事ハスブルロスに直ると申居候彼ハ米国で自身がやり又彼地にても、今年八順天堂病院内科主事といふので随分あつかふたもやう也

額田晋は明治四五年に東京帝国医科大学を銀時計で卒業した秀才で、大正二年四月に賀古の愛姪・カツラと結婚、大正六・七年にハーバード大学に私費留学し、帰朝後に医学博士の学位を授与された。頑として医師の診断を拒んだ晩年の鷗外が、唯一受診を肯んじた主治医として知られる。この年三四歳。信頼を寄せる氣鋭の医学者だった額田に、賀古は鷗外の症状や治療法を相談したようだ。

額田の答えは「牛乳、静養、成るべく氣長にやる方善し」。先に引用した八三で、常磐会が二日に延期された旨を報じながら「然し参会は御無用に遊され度候約もう一ヶ月のがまんに候少シク暖くなる迄八どつぞ外御無用ニ願上候」と慎重に静養を続けるよう促していた賀古としては、我が意を得た思いがしたに違いない。「いゆる（＝癒える・酒井注）事ハスブルロス（＝scurlous: 独ノ跡形もなく・酒井注）に直る」と額田の言葉を續けているのも、同様の心遣いであろう。それを守れば完治するのだからと、「瘦我慢」して無理を冒しがちな鷗外に自制を求めているわけだ。

しかし、先に見たように、鷗外は一六日から平常の勤務に戻ってしまった。「牛乳療法」を始めた二日には「参館」とあるから、実質二週間に満たない在宅療養だったことになる。この間は安静を守っていたとしても、賀古も「もう一ヶ月のがまん」と書いている通り、本来なら尿検査の結果を見ながら徐々に離床へと進めなければならず、早過ぎる復帰と言わざるを得ない。賀古の心遣いは空振りに終わったと言えよう。そして、鷗外が当然のように採用し、賀古も推奨、さらに額田まで太鼓判を押した牛乳療法。ここにも落とし穴が潜んでいた。

大正元年一月に内科学雑誌社から出版された『腎臓炎と其養生法』には以下のような記述がある。

「クレスチアン・デュ・モンペリエ」の如きは「牛乳が然らずんば死」と迄絶叫した、蓋し腎臓病者は牛乳を飲まざれば死すと云ふ意味である。此の説は近年迄殆ど一般に信ぜられて居た、吾国の医師などは、今日尚固く信じて居るものが少なからうと思はれる。併し近来多数学者の傾向を見るに、大に其趣を異にして居る。(134頁)

特に設けられた「附録／養生法に関する一二の注意」と題する章中「二三食品の批評」の第一、「牛乳は腎臓病者に最も適当なる飲料であるとは、随分昔から唱へられて居つた。」と始まる「牛乳并其製品」の一節である。腎臓炎について「諸種の疾病中、本病の治療は特に最新該博の智識を要する」(69頁。「腎臓炎の療法」の章)と書かれてもいるように、最新の知見を以て蒙を開くことも本書の目的であつたろう。さらに、結論として以下のように駄目を押す。

要するに、牛乳は腎臓炎患者の食品として適當なるものゝ一である。併し其適否分量等に関しては十分の注意を払はねばならぬ。故に腎臓炎とさへ云へば、無暗に牛乳の飲用を強ゆるが如きは、蓋し時代に後れたる考へであると云はねばならぬ。(138頁)

鷗外は強いられただけではないが、本書の記述から見れば、大正九年において牛乳を腎臓炎の特効薬のように「尚固く信じて居る」のは「時代に後れたる考へ」に他ならなかったわけだ。⁽²⁸⁾ 著者は皮肉にも、晋の七歳上の兄・額田豊である。

豊は既に「牛乳八果シテ腎臓炎患者ノ理想的食品ナルカ」(『東京医事新誌』明治44年1月)で同様の趣旨を述べており、一三六四前後の時期の類書でも、吉本清太郎「腎臓炎ノ療法」(『実験医報』大正8年4月)の「牛乳ハ……急性腎炎及び尿毒症ノ或る時期ニ於テハ無効有害ナル場合アレバ、治療家ノ考慮スベキモノトス」(83頁)や、佐々廉平「腎臓疾患ノ病理及ビ療法」(『南江堂』大正11年12月)の「今日腎炎患者ニハ昔ノ儘ノ純牛乳療法 *reine oder absolute Milchkur* ハ使ハヌ」(297、298頁)など、牛乳療法は過去のものとして叙述されている。牛乳療法はもはや万能ではなく、豊の所説の正しさが浸透していた様子が窺えよう。⁽²⁹⁾ 先述のように記した所以である。

賀古は単なる気休めのつもりで書いてはいないだろうし、晋も専門医による経過観察など「注意を払」った「飲用」を前提に話したのかも知れない。しかし、鷗外は余りに早く安静を切り上げてしまった上、間違つた療法によって完治した⁽³⁰⁾「すつかり健康」になったと誤解してしまったわけだ。

こう見てくると、「用心シロ土台ニ萎縮腎ガアルダラウ」トオドカシ⁽³¹⁾た小金井の言葉が改めて注目される。静男の死因から体質的な遺伝を念頭に置いての発言だったのだろうが、コロナ禍、特にオミクロン株以後、基礎疾患を悪化させて死に至るリスクを繰り返し耳にした我々には、何とも重く響く。インフルエンザは「急性腎臓炎」を「続発」させることによって、萎縮腎という宿痼、鷗外にとっての時限爆弾のスイッチを押したのではなかったか。⁽³²⁾ 牛乳療法について検討がなされなかったように、この可能性も今まで指摘されてこなかった。しかし、

新型コロナウイルスのパンデミックを経験した今日だからこそ浮上する、看過できない新たな視点だと言える。

今日の目から見れば、鷗外が「三六一」で書いている感染対策にも疑問が残る。「為シ得ル限ノ隔離ヲナシ」て杏奴や類を感染から守っている一方で、鷗外は腰痛で立居が不自由になるまで通常の勤務を続けている。患者が出てしまった以上、家庭内隔離は妥当な対策であり、それ以外の方法もなかったろう。しかし、鷗外は明らかに濃厚接触者（キャリアー）である。高熱は出ていなくても喉や鼻に軽い風邪程度の違和感があったかも知れず、より早い段階で出勤を控えるべきだったに違いない。

これもまた、医師としての鷗外が「適切」と考える対処方だったのだろうが、医学は確実に進歩している。当時において牛乳療法が過去のものとなっていたように、今日のウイルス対策から見れば、鷗外の措置には矛盾が目立つようになってきているわけだ。どこか「カズイスチカ」（『三田文学』明治44年2月）の「翁」の姿が連想されよう。

六、インフルエンザ体験から「社会問題」へ

カリ・ニクソンは『パンデミックから何を学ぶか 子育て・仕事・コミュニティをめぐる医療人類学』（みすず書房 二〇二二年九月）で、パンデミックから学ぶべき「教訓⁹」として「わたしたちは仲間を守らなくてはならない。」を掲げ、以下のように述べる。

病原体によってすべての人がつながっていることがあらわになるとすれば（確かにあらわになっている）、すべての人が互いの成功に関係していることも生物学的な事実だ。利己的な理由からだとしても、全員が全

員の安全を守る義務がある。(67頁)

さらに、続く「教訓10 共通の基盤を見つけよう、でなければいずれ思い知ることになる。」では、「パンデミックという特殊な状況が」、「世界の多くの地域で」、「目立ってきている」、「政治的・社会的な「極化」の脅威をさらに危険なものにしている。」(77頁)との危機感に立つて、「よくも悪くも、感染症には本質的に人々を結びつける力があり」、「わたしたち全員がつながって依存し合っていることを見せつける。」(同)とも述べている。

「病原体」は、「政治的・社会的な」立場の違いに関わらず、誰にでも感染してパンデミックを惹き起す。従って、それを乗り越えて生き残るには、対立を越えて連帯し、助け合わなければならない。だからこそ、パンデミックが人類にもたらす重要な教訓として、連帯と互助の重要性が強調されるのだ。

この教訓を「スペイン・インフルエンザ」のパンデミックに当てはめてみよう。当時の状況について、『史上最悪のインフルエンザ』に以下のような記述がある。

スペイン・インフルエンザは発疹チフスや結核のような他の感染症にくらべ、田舎、都会を選ばず、また地主、小作人、資本家階級、労働者階級の別なくすべてのグループに対して同じような割合で病をもたらし、みな等しく病気にしていた。(金持ち階級は若干まじったが、それもほんのわずかの差であり、多くの場合金持ちであることが物を言うようなことはなかった)。(400頁)

ウイルスは貧富の違いに関わらず「みな等しく病気にして」おり、まさに「病原体によってすべての人がつながっている状態にあった。しかし、「田舎」に住んでいる人と「都会」に住んでいる人、「地主」や「資本家階級」と「小作人」や「労働者階級」とが、同じ治療を受けられたとは思えない。地域差はひとまず置くとしても、感染・発症した場合に受けられる治療は、最も富裕な層から最も貧困な層まで、それぞれの経済力に応じて違って

いたはずだ。連帯と互助によって「全員が全員の安全を守る」平等な状況からはほど遠く、「二極化」していたのが実状だったのではあるまいか。

そんな分断状況を、第一回流行の渦中で與謝野晶子が発表した「感冒の床から」⁽³¹⁾に見てみよう。晶子は、「スペイン風邪」が猖獗を極める理由として「盗人を見てから縄を綯い」「米騒動が起らねば物価暴騰の苦痛が有産階級に解ら」ない「日本人に共通した目前主義や便宜主義の性癖」を挙げ、「米騒動時には重立った都市で五人以上集まって歩くことを禁じ」ながら、「逸早くこの（伝染の・酒井注）危険を防止する為に大呉服店、学校、興行物、大工場、大展覽会等、多くの人間の密集する場所の一時休業を命じなかった」政府の不手際を指摘、さらに以下のように続ける。

今度の風邪は高度の熱を起し易く、熱を放任して置くと肺炎をも誘発しますから、解熱剤を服して熱の進向を頓挫させる必要があると云ひます。然るに大抵の町医師は薬価の關係から、最上の解熱剤であるミグレニンを初めピラミドンをも吞ませません。胃を害し易い和製のアスピリンを投薬するのが関の山です。一般の下層階級にあつては売薬の解熱剤を以て間に合せて居ります。かう云ふ状態ですから患者も早く癒らず、風邪の流行も一層激しいのでは無いでせうか。官公私の衛生機関と富豪とが協力して、ミグレニンやピラミドンの中流以下の患者に販売するやうな應急手段が、米の販売と同じ意味から行はれたら宜しからうと思ひます。平等はルツオに始まつたとは限らず、孔子も「貧しきを憂ひず、均しからざるを憂ふ」と云ひ、列子も「均しきは天下の至理なり」と云ひました。同時に団体生活を共にして居る人間でありながら、貧民であると云ふ物質的の理由だけで、最も有効な第一位の解熱剤を服することが出来ず他の人よりも余計に苦しみ、余計に危険を感じると云ふ事は、今日の新しい倫理意識に考へて確に不合理であると思ひます。（173頁）

ここには、貧富の差がもたらす「二極化」の様相が、生々しく具体的に描き出されている。流行の現場では、貧困層の患者たちが「平等」とはかけ離れた「不合理」にさらされる現実があつたわけだ。直接行動には神経を尖らせて「五人以上集ま」ることを禁じておきながら、感染防止のために「人間の密集」を避ける措置を講じようとはせず、「最上の解熱剤」を「中流以下の患者に販売するような應急手段」も講じない。つまり、「米騒動」で得たはずの教訓を政府は何ら活かせておらず、このままではニクソンが言うように「いずれ思い知ることになる」。論の射程はそこまで伸びていると思われる。晶子を「労働者階級」と呼ぶのには無理があるが、「大正デモクラシー」の世相を背景に民衆の目線から書かれた批判であり、「中流以下」の現実を伝える貴重な証言と言えよう。

では、自身も「スペイン風邪」の無類のしつこさに苦しめられ、八四（二月三日付）で「常磐会も此度の風邪に八随分たゝられ」と書いてもいた賀古の場合はどうだろうか。そう関心を向けると、例えば七八（一月一日付）にある「千葉の農産問や曰」として「地方のもやう」を伝えた長い聞き書きが目を惹く。ここでは農民や漁夫、最下層の労働者など、一般に貧しいと信じられている者たちが、実は（地主など上位の階層の者たちが手にするはずの財をかすめて）「有福」になっていると語られているからだ。「小作人」について述べた一節を引いておこう。

小作人も福々ですたとへば一段五俵とれる田ナレバ三俵八地主へ二俵八小作人がとる、不作の年八大コボシにコボシテ地主を弱らせる、ソレ二千葉で八茂原町の農学校に学ぶ者が追々多くなり、一村に一人でも学んで帰村すれば青年会の者ら集り夜学をする、であるから肥料の用ひ方ナゾ二好く通じ小作人デモ一段五俵の田から七、八俵もあげるソレデやはり地主へ八三俵しかやらぬ、撰挙其外ナンノつきあひも無キ事故小作人

は大福タナリ

こんな調子で、他に「農夫」「小児の守ツ子」「漁夫」などが「ナカ／＼コスクナ」って儲けていると述べ、さらに「東京の人夫、車力や立坊^{タツ}」や「遠州木綿はた織女」も同様だと強調する。賀古は、この聞き書きに自身の経験した東京の「馬力」や「人力車」料金の高騰を書き添えて趣旨を補った上で、彼らが「文句八いはず二かせいでゐる中八よけれども一日不景氣風が吹きたゝバと怖れ申候」とコメントを記す。「いずれ思い知ることにな」るのでは、という危機感¹²は晶子と共通しているが、それぞれに示された「貧民」像は大きく違ふ。彼らには「官公私の衛生機関と富豪」による援助が必要だと主張する晶子に対し、七八では、利に聡く強欲で、抜け目なく立ち回ってしたたかに生きているのが彼らの実態とされる。「大正デモクラシー」の世相、民衆勢力の伸張は、こうした眼差しを通して「山縣有朋」たちに伝わっていたことになる。

賀古は鷗外の病状に細やかな心遣いを見せるのはもとより、大口鯛二や池辺義象の悲しみにも寄り添っている。自身も苦い経験をしているとは言え、他人の痛み¹³に共感できる資質を持っていた証拠であろう。しかし、賀古の眼差しは「労働者階級」には届かない。賀古は間違ひなく「最も有効な第一位の解熱剤を服すること」ができる地位にいたし、今日から見て有効性に疑問が残るとしても、娘に「毎日数回食塩水注射」を受けさせられた鯛二も、自身で「牛乳療法」を選択できた鷗外も同様である。人類の進化の根源に「共感力」を見る霊長類学者の山極寿一は「もともと共感力は1500程度の集団で働く顔見知りの仲間意識だ」と繰り返し説いているが、そのような限界を残酷なまでに露呈させたエピソード¹⁴と言えよう。治療を尽くした上で「随分たゝられ」たと言える彼らにとつて、医者¹⁵の診察すら受けられない貧困層の現実¹⁶は、そもそも想像力の外だったのかも知れない。無理からぬこととは言え、「共感力」が働く圏域は、まさに「顔見知りの仲間」に閉じていたのである。

政策の不備が「中流以下の患者」に「余計」な「苦しみ」と「危険」を強い、結果として「風邪の流行も一層激し」くなる社会構造は、まさに目前の社会問題に他なるまい。しかし、晶子のような問題意識が登場しないのはもとより、七八を除いて「労働者階級」「貧民」の具体的な状況が話題に上ることもなかった。この時期の鷗外書簡をテーマとする従来の研究において、専ら関心の中心とされてきた「社会政策」にせよ、一三六一（一月二四日付）や一三六三（二月一〇日付）など往復書簡で繰り返し言及される「社会問題」にせよ、こうした立場から話題にされていることを忘れてはなるまい。おそらく晶子と鷗外や賀古との間には、「事態を大局的に見る」という言葉に回収されない、どうしてもない感覚のずれがある。スパニッシュ・インフルエンザに関わる叙述を往復書簡にたどる営みは、その事実を改めて際立たせると言えよう。

おわりに

新型コロナウイルスによるパンデミックの初期、当時の安倍総理が配信したステイホームを訴える動画が物議を醸した。ステイホームが無収入となる危機に直結する非正規雇用者の現実がありながら、公務を離れて得たベツトと戯れる余裕を強調するかに見える動画を配信する、あまりに大きな感覚のずれは私たちの記憶に新しい。これは一例だが、前章に見たような民衆と為政者との感覚のずれは、今日なお依然として存在していると言えよう。残念ながら、ニクソンが掲げる教訓の多くを、人類は未だに活かせていないようだ。

しかし、私たちは現在、スパニッシュ・インフルエンザが日本を襲った当時とはちがう政治体制の下にある。「大正デモクラシー」がどれほどの盛り上がりを見せようと、大日本帝国憲法の時代には、物分かりの良い為政

者が施す善政を空しく待つしかない。しかし、日本国憲法の下で主権者たる国民は、一人一人が明確な意志を強く固に持ちさえすれば、自らの望む政治を行わせることが出来るはずなのだ。為政者に「ずれ」を修正させ、民意を尊重した政治を強制する。民主主義とは、本来そのような責任と自覚に立つ体制であることを忘れてはならない。

本稿では、新型コロナウイルスのパンデミックを経験した目で、賀古との往復書簡を通して鷗外のスパニッシュ・インフルエンザ体験を見直してみた。晩年の鷗外が構想した「社会政策」を検討する視座も含めて、彼とその作品について幾つかの新たな知見・視点を提示できたと思う。その上で、敢えて現実の社会問題と向き合う姿勢にまで筆を伸ばした。現代における「文学」のアクチュアリティ、そのレーゾンデートルの一斑なりと示せていれば幸いである。

注

(1) アルフレッド・W・クロスビー／西村秀一訳・解説『史上最悪のインフルエンザ 忘れられたパンデミック』（みすず書房 二〇〇四年一月）は、次のように流行の始まりを描き、以下「猖獗を極め」る状況を詳細に叙述している。

3月4日をかきりに、カンザス州のキャンプ・ファンストンでは、併設された病院に、発熱、頭痛をはじめ一般に力ぜでいわれるすべての症状を訴えて兵士が押し寄せていた。病気の正体であったかはともかく、その昔インフルエンザを表した言葉「ノックダウン熱（Knock-me-down-fever）」に、まさにぴったりだった。（39頁）

(2) 以下、本稿では原則として「スパニッシュ・インフルエンザ」（あるいは単にインフルエンザ）を用い、当時の日本の状況に言及する場合など、適宜「スペイン風邪」を用いる。言うまでもなく、先行文献からの引用はこの限りではない。

- (3) 引用は『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 人類とウイルスの第一次世界戦争』（藤原書店 二〇〇六年二月、13頁）に拠る。統計数値である以上、ここに挙げられている数字が唯一絶対ではない。例えば、立川昭二は『海上の道』をたどった疫病（『病と人間の文化史』新潮選書 昭和五九年三月）で「このインフルエンザによる死者は、アメリカで四〇万、イギリスで二〇万、インドでは何と五〇〇万といわれ」（25頁）「世界中でこのインフルエンザにより二五〇〇万の死者を算したと推定され」（26頁）と記しており、前注（1）は、しばしば用いられる「2100万人という数」に対し「世界全体での死者の数は、3000万人、あるいはもしかしたら4000万人とすべきではないだろうか？」（256頁）としている。
- (4) 『世界の新型コロナ感染者』（朝日新聞）「名古屋本社。以下同様」二〇二二年二月三一日「朝刊」に拠った。ジョンス・ホプキンス大学の集計に依拠してきたが、「全数把握をやめる国が増え」「実際の感染者数を十分に反映でき」なくなっただため、「掲載は年内をもって終了」する旨の「おことわり」が添えられている。信頼のおける最終値としてここに掲げた。
- (5) 大正一一年三月、同局刊。本稿では、同書を復刻した『東洋文庫778 流行性感冒 「スペイン風邪」大流行の記録』（平凡社 二〇〇八年九月）を使用し、引用等の底本に用いている。以下、特に注記しない場合も含め、スパニッシュ・インフルエンザに関わる本稿の叙述は、前注（1）クロスビー同書、前注（3）速水同書、そして本書に拠った。
- (6) 『新型コロナウィルス感染者』（朝日新聞 二〇二三年五月九日「朝刊」）。
- (7) 『流行感冒と石』の題で『白樺』大正八年四月号に初出。三年後、単行本『寿々』収録に際して改題。ドラマ『流行感冒』は脚本・長田育恵、演出・柳川強で、本木雅弘や安藤サクラらが出演。BS4Kで二〇二二年三月二七日、BSPで同四月一〇日、NHK総合では同一月六日に放送された。
- (8) 入手しやすいアンソロジーとして、『シリーズ紙礫14 文豪たちのスペイン風邪』（紅野謙介・金貴粉解説 皓星社 二〇二二年二月）や『文豪と感染症 100年前のスペイン風邪はどう書かれたのか』（永江朗編 朝日文庫 二〇二二年八

月) などがあり、菊池寛『マスク スペイン風邪をめぐる小説集』(文春文庫 二〇二〇年二月) のような、新編集による個人作家のアンソロジーもある。

(9) 『鷗外全集 第三十六巻 (岩波書店 一九八九年一月。書簡番号一三四四。以下、賀古書簡とも番号のみゴシック体で示す)。本稿において、鷗外書簡の引用は本巻に拠った。

(10) 宗像和重監修『文京区立森鷗外記念館所蔵 森鷗外宛書簡集1 賀古鶴所』(同館 二〇一七年一月。九〇)。本稿において、賀古書簡の引用は本書に拠る。なお、本書収録の書簡の内、一〇二通は松原純一『賀古書簡』(『鷗外』2 昭和四一年三月) でも翻刻されており、本稿でも適宜参照した。

(11) 紅野謙介は、前注(8)『文豪たちのスペイン風邪』解説「百年前の隣人たち」で、宮本百合子の『伸子』や武者小路実篤の『愛と死』など、このパンデミックを物語のキーとなる要素として描き込んだ後年の作品と比較しつつ、収録作について

歴史的なパンデミックを普段着で迎えなければならなかったわが隣人たちがどのように苦しみ、嘆き、右往左往したかをとらえることをここではお勧めしたい。

と述べているが、両者が虚飾なく伝え合った症状や予後、周囲の状況などは、まさに「普段着」の記録そのものと言える。

(12) 『森鷗外』(世界評論社 昭和24年4月) 75～83頁。ここで唐木は、後述するような激動する社会状況を前にして、

「幸か不幸か我々は実に非常なる時に遭達した」(大正七年一月二三日付賀古宛書簡「二二一九」からの引用・酒井注) と感じた。

と鷗外の心境を整理し、さらに「鷗外の革新意見を要約して」

基本方針は「国体に順応したるコレクティヴィスムス」である。国家社会主義である。帝室を保存するといふ条件以外は、非常に過激である。労資協調などは生ぬるく、血を見る方法、非合法的な政体革新運動である。経済的に

も一君万民の体制、官営主義である。これが実行力の根を山縣公に求めてゐたらしく、常盤会は歌会から逸脱して社会政策を談ずる中心になりにかねないやうなところがあつたと思はれる。

と述べた上で先の提起を行っている。

- (13) 山縣有朋を中心とする歌会「明治の標準調を定め」ることを目的とし、鷗外は賀古とともに幹事を務めた。政治色は薄かったとするのが一般的だが、一三三四に「御話申上候社会政策猶細密二申上度」とあり、七五にも「廿一日夜アレカラ二時間余り貴案に付き熟考」とあることから、浜崎美景が「常盤会序説」(『森鷗外周辺』文泉堂書店 昭和五十一年五月)で説くように、転換期の流動的な社会状況を背景に、話題が「社会政策」に及ぶこともあつたと考えられよう。
- (14) 「常盤会」をめぐっては、例えば「森鷗外と山県有朋」(『立教大学 日本文学』3 昭和34年11月)、「森鷗外と常盤会」(『文学』昭和34年2月)、「森鷗外と山縣含雪」(『文学散歩』16 昭和37年12月)など古川清彦の一連の論考、同様に「社会政策」については「山県有朋と森鷗外」(『森鷗外の断層撮影像』国文学 解釈と鑑賞 昭和59年1月臨増)、「社会政策 古い手帳から」(『別冊國文學』37 森鷗外必携 平成元年10月)など篠原義彦の一連の論考など多くの論考が蓄積されているが、それらの吟味も含めて詳細は後述の通り別稿に委ねることとしたい。なお、平川祐弘編『森鷗外事典』(新曜社 二〇二〇年二月)の「常盤会」の項に「社会政策」に関わる記述は登場せず、「社会政策」は立項されていない。
- (15) この点について、「賀古病院焼く/今曉小川町の火事」の見出しで火事を報じた『東京日日新聞』紙面(大正八年二月二日・七面)を媒に「大正八年二月二四日付森鷗外宛賀古鶴所書簡を読む 賀古病院の火事と柳田国男の退官」(『中京大学文学会論叢』第10号 掲載予定)を参照。
- (16) 同月二八日の「委蛇録」に、「額田晋第三子生。乞予命名。乃命曰楸。」との記載がある。
- (17) 前注(3) 同書で速水は「二月一日の『東京朝日新聞』第五面は、ほとんどが流行性感冒関連の記事で蔽われている。」と指摘し、該当記事の見出しを列挙した後、「いよいよ地獄の三週間が始まった。」と結んでいる(212〜213頁)。最も死

亡率の高かった第二回流行が最も猖獗を極めたタイミングで、賀古は（そして鷗外も）インフルエンザに罹患したわけだ。なお、『断腸亭日記』卷之四大正九年歳次庚申に「正月十二日。…（中略）…夕餉の後忽然惡寒を覚え寝につく。目下流行の感冒に染みしなるべし。」とある。奇しくも永井荷風も同じようなタイミングでインフルエンザに罹患していた（引用は『荷風全集』第二十一卷「岩波書店 一九九三年六月」に拠る）。二月十七日。風なく暖なり。始めて寢床より起き出で表通の銭湯に入る。」を一区切りと見れば、五週間ほどの闘病生活であった。『断腸亭日乗』の該当箇所は、前注（8）『文豪たちのスペイン風邪』『文豪と感染症』両書にも収録されていることを付記しておく。

- (18) 西郷従道の次男・従徳（明治一―「一八七八」年―昭和二―「一九四六」年）であろう。陸軍士官学校を経て明治三三年に少尉任官、従道の死によって三五年に西郷家を継ぎ侯爵を襲爵、翌年には貴族院議員となった。ここに登場する「心痺」（＝心臓麻痺）は、『流行性感冒』の第六章「流行性感冒の病原、病理、症候、治療、予防」に挙げられてはいないが、「心弁膜病に「インフルエンザ」は不良なる影響を与ふ。」（第三節「流行性感冒の症候」第四項「各臓器に於ける徴候及び合併症」二、循環器系等」。³³⁶頁。以下、本書から同じ章・節・項を引用する場合にはタイトルを省略する）などの記述がある。

- (19) 速水は「現在われわれが手にすることのできる唯一の医師による記録」として「非常に貴重」と評価し、前注（3）同書に「その大部分」を複製している。本稿の引用も同書に拠った。『流行性感冒』にも「経過割合に軽き時にても恢復期は永く、下熱後数週間に亘りて一般の倦怠、疲労、神経痛、関節痛、不眠あり」（第六章／第三節／第二項「一般経過」。³²⁷頁）など、なかなか日常に戻れない病症のしつこさに言及した叙述は多いが、五味淵の方がより端的で直截に叙述していると考え、本文には五味淵の記述を引用した。新型コロナウイルス感染者を悩ませる後遺症の問題も想起されよう。

- (20) いけば・よしかた（文久元「一八六一」年―一月五日「日付は西暦、以下同様・酒井注」―大正二二年三月六日）。明治大正の歌人・国文学者。帝国大学文学部古典講習科を卒業。明治三年から二五年にかけて落合直文や萩野由之ら

と『日本文学全書』全二四巻を編集。明治三一年から三四年までパリに留学。その後、京都帝国大学講師、御歌所寄人臨時帝室編修官などを歴任した。

- (21) おおぐち・たいじ（元治元「一八六四」年五月二日〜大正九年一〇月一三日）。明治三年に宮内省御歌所に入り、三十九年に寄人となった。詳細は『森鷗外宛書簡集』³ う・お 編（文京区立森鷗外記念館 二〇二二年一月）の人名注を参照。同書には、有職についての鷗外の質問に答えた葉書一通が収められている。『鷗外全集』には鯛二宛書簡は収録されていない。

- (22) 念のために整理しておく、この時、明治四二（一九〇九）年五月生まれの次女杏奴^{あんぬ}は九歳、同四四年三月生まれの三男類は七歳で、長女茉莉は前年一月に一六歳で仏文学者の山田珠樹に嫁いでいた。

- (23) どうしても週に一度は出勤する必要があったのか、六日と二三日（両日とも金曜日）には「参館。」と記されている。いずれにせよ、長い欠勤を強いられ「紀元節」の一日も「不参内」であった。

- (24) インフルエンザ脳症を連想させる「脳に水気を持ち一時（数ヶ月間）気の狂ひたるものを二人見候」についても、「流行性感冒」「第六章／第三節／第四項／四、神経系統」に「インフルエンザ」には神経炎、脳炎、脳膜炎、精神病を見ることがあり。（346頁）との記述がある。こうした症例は当時から注目されていたのであろう。なお同頁の「限局せる神経痛は三叉神経痛最も多く、坐骨神経痛又少からず、腰痛は第一日第二日に著明にして第三日頃より軽快するを常とす。」との叙述から、鷗外が「腰部諸筋力痛ミ」と書いていた症状を「神経痛」と考えることもできよう。無理を押して出勤した理由も窺えそう。なお、佐々廉平「腎臓疾患ノ病理及治療法」（後出）に「全身症状例へば水腫・呼吸促拍・腰痛等」とあるのを始め、急性腎臓炎の症状として「腰痛」が挙げられる場合もある。

- (25) 例えば、佐々廉平「腎臓疾患三型の臨牀要項と其の治療」（日本医書出版株式会社 昭和21年10月）に「元来急性腎炎の大多数は、扁桃腺に於ける連鎖球菌感染に出るもの」との記述がある。

- (26) こがねい・よしきよ（安政五「一八五九」年一月一七日〜昭和一九「一九四四」年一〇月一六日）。解剖学者・人類学

者で、来日したエリーゼとの交渉役を務め、孫の星新一に『祖父小金井良精の記』（河出書房 一九七四年。二〇〇四年に河出文庫）がある。なお、「昨夕小金井来り」に対応する「委蛇録」の記述は、二月八日の「小金井良精至。」。小金井も同日の日記に「午後千駄木え見舞旁々行き、歯牙変形論通覧を頼む、林先日來腎臓炎のよし、大に摂生を勧めたり」と記している（『小金井良精日記 大正篇』クレス出版 平成27年12月、306～307頁）。従って、二月十日付ではあっても、実際は九日に書かれ、その日の内に投函されたのであろう。翌日の集配を予想していたところ、当日分に間に合ったものか。

(27) 以下のような医学辞典の記述を見ると、今日でも、特効薬など腎機能そのものを回復させる方法はないようだ（引用は『医学書院 医学大辞典』『医学書院 二〇〇九年二月第二版』に拠る。項目執筆は原田孝志）。

細動脈硬化性萎縮腎、腎盂腎炎性萎縮腎、水腎症性萎縮腎、糸球体腎炎および全身性疾患に合併する続発性萎縮腎などがある。萎縮腎は不可逆性変化であり、最終的には腎機能は廃絶し、透析療法が必要となる。

(28) 本書は「増訂二版」（日本医学通信社 大正五年七月）、「増訂第三版」（金原書店 大正七年五月）と、出版社を変えて版を重ねている。広く流通した証拠であろう。「増訂」とはあるが、該当箇所について変更はない。

(29) 例えば『大百科事典』第六卷（平凡社 昭和7年5月）「牛乳療法」の項（執筆は佐々廉平）の昔牛乳が腎臓病の特効薬のやうに過信せられ、牛乳以外何物も与へずこれを飲み得るだけ多量に飲ませた。これを「絶対または純牛乳療法」といひ、今日は全く廃止せられた。

という記述など、その認識が一般にも定着した証拠のように思われるが、中島三樹三郎『腎臓病とその治し方』（日本文芸社 昭和35年8月）に、

牛乳療法も、今日では昔のように用いられず、唯第二期（個定期）に半リットルまで、第三期（回復期）に一リットルまで使用する程度です。腎炎に対しては如何なる場合でも牛乳の使用は一・五リットルを越えてはなりません。これは、牛乳だけで充分栄養を与えるには、一日三、四リットル（二〇〇〇～二六〇〇カロリー）を要し、水分と

食塩と蛋白質が過量になるからです。(56頁)

のような記述があるのを見ると、ひとたび広く信じられて常識のように用いられた治療法を駆逐・修正する難しさを実感される。

(30) 前出『腎臓炎ノ療法』には「腎炎ノ経過終末期ニ於テ屢々遭遇スル所謂萎縮腎」(79頁)とあり、前注(29)『腎臓病とその治し方』には「急性腎炎が完全に治癒しないで、多くは第一期(急性期)の治癒後、数年間の間歇期(第二期の間期)を経て、第三期の萎縮腎(腎臓機能不全)となり、遂に真性尿毒症に終るのです。」(46頁)とあるなど、特に人工透析の普及以前において、急性腎炎から萎縮腎へと悪化する危険性についての言及は多い。

(31) 初出『横浜貿易新報』大正7年11月10日。このエッセイの存在は前注(8)『文豪たちのスペイン風邪』に教えられ、引用は『與謝野晶子評論著作集』第十八巻(龍溪書舎 二〇〇二年一月)に拠った。

(32) 本稿の引用は「科学季評 人類はどこで間違えたのか/共感力と技術 賢い使い方を」(『朝日新聞』二〇一三年「令和五年」三月九日)に拠る。

引用は全て注記した文献に拠り、旧漢字は人名など一部を除いて現行の字体に改め、仮名遣いは原文通りとした。ルビ・圈点等は適宜省略している。